言葉の耳袋（4）
音読は人生を彩る

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA　顧問　教育アドバイザー
張江　幸男

滞在期間の長短にかかわらず、海外に住む子ども達への日本語の教育は保護者にとって大きな問題です。
このコラムでは、海外・帰国子女教育の大ベテランが「海外での日本語教育」へのアドバイスを語ります。

1、声を出す場面

読みきかせの大事さを前号まで書いてきました。 今回は、 音読の必要性を考えてみます。

ふと、 周りを見回すと、 声を出す場面がこんなにあったのかと驚いてしまいます。 しかも、 相手の言ったことを確認することが、 重要な職務の一部になっているものさえあります。

先日のニュースに、 ある飛行機の操縦士が、 管制塔の指示を復唱しなかったことが事故に繋がったと報道されていました。

職場では伝達事項の口頭での復唱、 人間関係や、 接遇で人と関わる折に、 伝言の復唱はかかせません。

バスや電車の運転手さんが操作中に、 信号や時刻ダイヤを律儀に指さし、 確認しながら復唱しているのは、 まさに声を出しての読み取り、 音読そのものです。

アメリカの小説の中に、 ある老婆が花屋さんに毎日花を届けさせ、 その店員に必ずクレームをつけるという話があります。 その老婆は身寄りも付き合っている人もなく、人と言葉を交わすのは、 元気なよい声の持ち主である青年の店員ただ一人だったのです。

2、初めての音読

私は7人きょうだいの4番目です。 幼児のころ、 兄姉は学校から帰ってくるとまずお八つをたべ、 次いで教科書の音読をさせられました。 母は繕い物をしながら聴いていました。 次姉は要領がよく、 時々、 飛ばして読んだりしたが、 母もさるもの、 傍に置いた物差しでピシャリと腿を叩きました。 幼心にもそれは厳粛な時間と心得、 静かに聴いていた。 そのうちに何回も聴くものですから、 1年生の国語読本などは暗記してしまいました。 時々、 一緒に音読し、 母に褒められ有頂天になったものです。

3、音読重要論

作家の中野孝次さんは、 次のように書いておられます。

学校では読本（国語の教科書）の朗読にもっと時間をかけてほしい。 声をあげてただ文章を読む、あれは実によかったと思う。 日本語を覚え、 文章のよさを味わうには、 意味などを問うより、 ひたすらそれを朗読させるのがいい。 わかってもわからなくても、 読むことで文章の響き、 調子、 流れをにじませ、 できれば暗記させて、 からだで日本語の味わいを覚えることが大事なのです。

示唆に富んだ、 強烈な音読論です。

海外で育つ子どもたちの言語環境（家庭）は、 そこにポツンと存在する日本語という孤島にたとえられます。 家族の中での日常会話は、 どの家庭でも日本語主体でしょう。 これは海外にいる子どもにとって言葉の生命線ですから、 大切に守らなければなりません。 ところが、 この日常会話は表現のパターンも、 表現の内容も大体きまっています。 語彙が少なく、話型も固定していて、 省略の多い言葉だったりで、 日本語学習の言語環境としては欠けるところが少なくありません。

その欠けたところを、 補うことのできるのが音読です。 ご両親、 とりわけお母さんの日本語教師としての存在は大きいと思います。

1、 しっかりとした声（大きな声）で読む
2、 正しい発音で読む
3、 ゆっくりした調子で読む
4、 つっかえずに、 すらすらと読む

海外生活の長短、 その他の条件によって日本語の理解度もいろいろでしょう。 読み方と合わせて、 文字やことばの意味などに触れなければならないこともあるでしょうが、 音読のねらいの基本的な条項は上の4つでいいと思います。

国内ですと、 アクセントとか、 イントネーション、 心情的な側面の表現などを理解しているかも求められますが、 低、 中学年の子どもであれば、 上の4か条を狙いにしましょう。

4、暗誦のすすめ

何回、 何十回と読んでいると、 自ずからそれを暗誦することができます。 これも非常に望ましいことです。 記憶力のいちばんある子どものころに暗誦したものは、 なかなか忘れません。 何かのときにふっと思い出されます。 多分、 意識の深いところで日本語を支える力になっているのだと思います。

小学生は、 教科書の文章、 百人一首、 カルタのようなものに馴染ませる。 中高生では、 ことわざや古典にふれさせる。 もし、 万葉の短歌を50首も暗誦できたとしたら、 生涯の心の財産になるでしょう。